連載



このコーナーでは、鋳造界で活躍する 人々に登場してもらい、鋳物とのかかわり やそのほかさまざまなお話をしていただ きます。今回は 2020 年度 Castings of the Year 賞に輝いたゴジラ南部鉄瓶(本 誌表紙写真)を製作された(株)及富の菊地 章さんにお話を伺いました。

インタビュア:日産自動車(株) 神戸洋史

事務局 鈴木理恵

●氏 名: 菊地 章さん(63歳)

●出身地: 岩手県

●略 歴: 東京造形大学彫刻科卒業.78年4月,東京の企業に入社. 80年3月退職,同4月,株式会社及富入社,現在に至る.

Castings of the Year 賞の受賞, おめでとうございます. ゴジラの鉄瓶とはインパクト抜群ですが, 作製にあたってはいろいろ苦労されたことも多いのではないでしょうか.

本 デザイナー、版権元の東宝、そして私、それぞれに 思い入れのある自分たちのゴジラ像を持っていて、それを形にしていくのに苦心しました。工業製品と違って、ゴジラにはたとえば鼻の長さとか目と目の間隔などに 規格があるわけではありません。だから人それぞれ、もっともかっこいいと思うゴジラって微妙に違うんです。 鋳物屋からすると、なるべく鋳造しやすい形にしたいですよね。でも相手は複雑な形をした怪獣、簡単にやろうとするとそれはもうゴジラではなくなってしまうんです。これまでやってきた砂型の技術ではとても対応できませんでした。何度もやっては失敗を繰り返して、一人でできるわけではありませんから会社の皆が協力してくれますが、注目

される中「ああ、専務はまた失敗しているよ」という視線を浴びるのは結構つらかったですね(笑).

そもそもどうしてゴジラを作ることになったかというと、実はその前にイギリス人彫刻家の提案でトリケラトプスの鉄瓶を作ったことがありまして、それを知人に見せたところ、初代ゴジラのスター俳優、宝田明さんと知り合いだから持って行ってみようという話になったんです。宝田さんは一目見るなり「いいじゃないか、ゴジラの鉄瓶を作ろう!」と、こちらが言い出すまでもなく乗り気になって東宝に話を付けてくれました。そこから納得のいくゴジラ鉄瓶を作るまでには2年かかりましたが、宝田さんはご自分の歌謡ショーなどに持っていっては「2台売れたよ!」などと報告してくれます。喜んでもらえてよかったなと思います。

ゴジラの鉄瓶を携え、アメリカで開催された怪獣ファン向けのイベントに同行させてもらったのもいい思い出になりました。怪獣グッズはプラスチックとかゴム製のものが多いですが、その中で南部鉄瓶の堂々とした佇まいは迫力があり、アメリカのファンにも相当衝撃を与えたようですね。お茶会を催したりもして、楽しかったです。

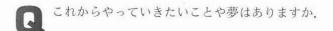
ほ 鋳物の街水沢で歴史のある御社. 菊地さんも子供 のころから鋳物に親しんでこられたのでしょうか.

本生まれた時から当たり前に鋳物がありました.子供のころは工場に入って道具を振り回して遊んでいましたし.そして,私の祖父も父も,鋳造の仕事に誇りをもっていました。本当は経営者としていろいろ苦労もしたのだと思うのですが、そんな姿は表には決して見せず、いつも楽しそうに仕事をしている印象しかありません。父と炬燵に入っていても、ふと何かがひらめくとその辺に置いて



あった広告の裏に急にスケッチを始めたりするんです。そんな姿を見て育ちましたので、私も特に悩むことなくこの世界に入りました。そして、祖父や父がそうしてきたように、楽しく仕事をさせてもらっています。

とはいえ, 私はもともと楽観的な性格なのか, 難しそう だなと思うものでも「なんとかなるだろう」と引き受けて しまうところがあります. ところが, なんとかならないこ ともあるんですよね(笑). 以前,公共のお仕事をいただ いたときのことですが、納期が厳しかったこともあり、思 うように進まなかったことがありました.納期の延長のお 願いのため役所に出向いた私に担当者は怒り心頭、「何し に来た、帰れ!」と割れんばかりの大声で怒鳴りました. 私はその場に立ち尽くして震え上がり、部屋にいた全員が 凍り付くような緊張感でした.「ここでこんなことしてい る間にも、帰って作るのが仕事だろう!」と叱られ、頭か ら氷水を被ったような気持ちになりました. 私は飛んで帰 り、寝る間も惜しんでなんとか納期に間に合わせました. 後にも先にも、人にこんなに叱られたのはこれ1度きりで す. だから自分の教訓として,強烈に印象に残っています. この仕事を40年もやっていると、ここまでではなくても それなりにピンチは訪れます. でもその都度何を優先すべ きか、そしてピンチをうまくチャンスに変えるにはどうす ればいいか、だんだん見えてきます。鋳造というのは型に はめ込んでものを作りますが、発想は大胆に、計画は緻密 に、実行は速やかに、そして最後まで諦めないことが大事



A 及富は172年間鋳造を続けてきました。その間,第二次世界大戦、オイルショック、バブル経済崩壊、東日本大震災と、数々のピンチが会社を襲ってきました。でもその都度皆で知恵を絞り、乗り越えてきた歴史があり





ます.だから今日あるのも、自分の力ではないということを強く感じます.先達がやってきたことのいわば「いいとこどり」ができる.それが歴史の重みだと思いますし、だからこそ、この先さらに100年続けていかなければいけないという使命を感じます.伝統を重んじ、しかし伝統に縛られることなく、工芸とアートをバランスよく取り入れ、誰もが思わず手に取ってしまうような、人の五感に心地よく触れる南部鉄器を作っていきたいと思っています.そしてこの水沢地区は、鉄と共に、鉄に支えらえてきた街です.いつかこの街を舞台に、鉄をテーマにした世界規模のシンポジウムやアート展を開催するのが私の夢です.

以前,岩手大学特任教授の堀江先生が鋳物組合に講演に来てくださり「鉄は戦争の道具ではなく,人々が楽しく暮らすための大切な資源。地球の原点は鉄と水です。そこに生業としてかかわっていることに誇りを持ってほしい」とおっしゃいました。これは私には生涯忘れられない言葉として心に刻まれています。これからも多くの人に受け入れてもらえる良いものを作り続けていきたいと思います。

